

釈尊の生涯(2) 降魔～成道



初転法輪仏坐像。サールナート出土、グプタ朝5世紀後期。

出家したゴータマ・シッダールタはマガダ国の首都、ラージギル
おうしやじょう
(王舎城)に行き、そこで二人の仙人について禅定を学びました。
続いて、ガヤ近郊の苦行林に入り、極限までの苦行をしました。し
かし、苦悩からの解脱をえることはできませんでした。

マガダ国 ゴータマが向かったマガダ国は当時最大の強国であり、その首都の王舎城は自由な気風があふれた新興都市でありました。そこには農村共同体に根ざした古いバラモン教に飽き足らない都市住民が生まれていて、そうした人々の願いを背景にして、神々を

恐れ神々への儀礼を説くバラモン教を否定して、人間の現実に基づく新しい宗教(思想)をうち立てようとする沙門たちが集まっていたのでした。

六師外道 ろくしげどう そうした沙門の中には、輪廻など恐れる必要はないという虚無主義者や、すべてのことは前世に決まっているという運命論者や、未来の悪果を恐れて極端なまでの禁欲主義者や、唯物論者や戒律主義者などがいました。

禅定 そうした中でゴータマ・シッダルタがはじめに選んだのはアーラーラー・カーラーマという仙人が教える「無所有処」の禅定でした。仏伝によれば、ゴータマはそれをすぐ体得しましたが、苦の解脱にはなりませんでした。次に、ウツダカ・ラーマブッタという仙人から「非想非非想処」を学びましたが、やはり苦悩からの解脱を得ることはできませんでした。

苦行 そこでゴータマは、マガダ国のガヤ近郊のウルヴェーラーの苦行林に入り、極限までの苦行をしたと言われています。(勤苦六年)

ゴータマが禅定と苦行の道を選んだのは、それが当時のインドにおける求道の基本的な方法だったからでありました。しかし、ゴータマが願った苦からの解脱にいたることはできませんでした。なぜでしょうか。

仏教は「無我」の教えと言われていますが、それは我執の否定であって、主体性の放棄を説いているわけではありません。仏教は我執を否定したうえで、法に目覚めた智慧による真の自己の確立をこそ説いているのです。それが、じとうみょう ほうとうみょう 釈尊の遺言である「自灯明、法灯明」であります。

自己消滅 私なりに考えてみるに、「無所有処」や「非想非非想処」の境地を目指した禅定も、身体を極限までいじめ抜く苦行も、結局は自己の消滅によって苦悩の解決を目指す道と言えないでしょうか。禅定は心をしずめることによって煩悩が起こらぬようにし、苦行は煩悩をひき起こす肉体の活動を抑えることによって煩悩を押さえ込もうとします。ひとこと言えば、自己(弱い自己・情けない自己・罪深い自己)の消滅による自己克服の道であります。 *オウム真理教もそうでした。

こうして実現した境地は社会から離れた非日常的な境地であり、生身の人間から遠く離れた非実存的な境地であります。インドでは今でも、非日常的な時空に生きるヨガの行者が尊ばれていますが、釈尊は2500年前に、それらは「道にあらず」と、新しい道を求め

られたのでした。

自己確立 それならゴータマが求めた道とはどういう道であったのでしょうか。私は、自己消滅の道でなく、苦悩を受けとめ苦悩を生き抜く新しい自己の発見の道でなかったか、と思うようになりました。仏教は「無我」の教えとされていますが、その一方で、釈尊の遺言として伝えられている「自帰依・法帰依」「自灯明・法灯明」の教えがあります。

自灯明・法灯明 「自灯明・法灯明」とは「自らを灯明とし、自らを依処よりどころとして、他を依処とせず、法を灯明とし、法を依処として、他を依処とすることなかれ」ということです。「自らを灯明とし、自らを依処として」というわけですから、「無我」といっても、決して自分がなくなってしまうことではないのです。

* 「無我」については後で考えてみます。

「自灯明・法灯明」の教えでは、「自」と「法」とを依処とし、「他」を依処とするな、と説かれています。ですから「自」と言っても、それは「法」に基づく「自」であります。それに対し、ここで「他」と言われるものは、「自」を離れ「法」を離れた「他」であります。それなら、「自」を離れ「法」を離れた「他」とは何かとえば、人間世間を覆っている欲望と恐れであり、人間の運命を決定すると思われていた神々のことでもあります。そうした世間の価値や神々に盲目的に依拠することをやめて、「法」に目覚めた真の「自(己)」、すなわち智慧に基づく新しい自己を確立せよというのが、釈尊の言う「自灯明・法灯明」であると思います。

* 「法」についても次回考えてみます。

こう考えてみると、ゴータマが禅定や苦行で満足できなかったという事実の中に、ゴータマが求めていた方向が暗示されているとも言えそうです。

苦行林から出てきたゴータマ・シッダルタは尼連禪河で身体を洗い、スジャータが捧げた乳粥をいただきました。そして、ピッパラ樹の下に端座して「苦」からの解脱を求めて瞑想を始めました。すると、その瞑想をやめさせようと魔の大群が次々と襲ってきたのでした。

悪魔 仏伝では、菩提樹下で瞑想に入られた釈尊に、次々と悪魔が襲いかかったと伝えられています。「魔」と翻訳されたものの言葉は「マーラ」といい、「殺すもの」という意味です。仏伝では釈尊が魔と戦う姿が脚色豊かに描かれています。要約して言えば、脅しと誘惑です。時には手に手に剣を持った悪魔の大群となり、時には快樂の世界に誘おうと

する美女の群れとなって、ゴータマの前に姿を現しました。

降魔(ごうま) しかし、いかなる脅しや誘惑をもってしても、ゴータマの瞑想を止めることはできませんでした。ゴータマは魔との戦いに打ち勝ったのです。

ところで、「魔」に打ち勝ったとはどういうことでしょうか。それは、「魔」の正体を明らかに見たということだと思います。「魔」は、実は外にいるのではなく、自分の中の欲望や恐れ、つまり煩惱の裏返しの相であり、真理に対する迷い、つまり無明が引き起こした妄想だったのです。この「降魔」こそ、ゴータマにおとずれた悟りの瞬間だったのではないのでしょうか。

仏伝によれば、ピッパラ樹の下で瞑想を始めてから七日目の十二月八日、明けの明星の輝く時、ゴータマは悟りを開いて、ブッダ(覚者) となったと伝えられています。

菩提樹 ゴータマがその下で悟りを開いたピッパラ樹は、そのことにちなんで「菩提樹」と呼ばれるようになりました。また、悟りを開いたガヤの地は「ブッダ・ガヤ」と呼ばれ、悟りを開いたピッパラ樹の下は「金剛法座」として大切にされました。そこには7世紀に建立された53柱の大塔からなる「大菩提寺」が建っています。



さて、悟りを開かれたブッダは次のように宣言されました。

我が生すでに尽き
梵行すでに立つ
所作すでになし
自ら後有を受けずと知る

永い永い迷いの生に終わりを告げる時がきた。
私の前には今、真実の道があきらかになっている。
なすべき事をなし終えた今、
再び迷いの生に戻らぬことを、はっきりと知ることが
できる。 (知道試訳)

【参照】善導大師「前念命終 後念即生」

親鸞聖人「雑行を棄てて本願に帰す」

曾我量深師「信に死し願に生きる」

さて、菩提樹下の瞑想によって正覚をえたゴータマ・ブッダは、それからどうしたのでしょうか。仏伝によれば、菩提樹のもとに端座したまま、一週間、ひとり寂かに解脱の歓びを味わわれたといます。それなら、一週間にはその歓びを人々に伝えんとして伝道の旅に出たかという、そうではないのです。なぜか、その後も、1週間ごとに違う大樹の下に座を移し、瞑想を続けられました。この数週間の瞑想は何を意味しているのでしょうか。

法による ゴータマ・ブッダは成道から一週間、菩提樹の下で解脱の歓びを味わわれました。次いで、ブッダはアジャパーラ樹のもとに移動して、そこで一週間、瞑想をしたと伝えられています。この時、ブッダは心の中で次のようなことを自問自答されました。

「尊敬すべき者がなく、従うべき者がいないありさまは苦しい。私はいったいどのような修行者を尊敬し、敬い、頼ったらよいのだろうか？」

…「私はこの法（ダンマ）をさとったのだ。私はその法を尊敬し、敬い、頼っていくようにしよう」
『サンユッタ・ニカーヤ』

欲望の超越 続いて、ブッダはムチャリンダ樹のもとに移動して、また一週間、瞑想をしました。その時、ブッダを風雨から護ったムチャリンダ竜王に、次のように語ったといわれています。

満足して、教えを聞き、真理を見るならば、孤独は楽しい。… 世間に対する食欲を去り、もろもろの欲望を超越することは楽しい。〈オレがいるのだ〉という慢心を制することは、実に最上の楽しみである。 『ウダーナ』

次第に、覚りの内容が具体的に語られるようになっていきます。

引き続いて、ブッダはラージャーヤタナ樹のもとに移動して、また一週間、瞑想をしました。その時、二人の商人がブッダに帰依したと伝えられています。

樹木を変えながら続けられた瞑想は数週間に及んだようですが、経典によっては、その間に「縁起の理法」(*次回考えてみます)が次第に明らかになったとも伝えていきます。

覚りの瞬間 ところで、成道後にブッダがとったこのような行動をどう受け取ったらいいいのでしょうか。以下、私なりの了解を述べさせてもらいます。

十二月八日、明けの明星のもと、ゴータマに突然おとずれたその目覚めとは、迷いの基本構造が明らかになったことだと思えます。ひとことで言えば、「生老病死」そのものが問題なのではなく、「生老病死」の事実を受けいれることができない自分の心の方こそが問題なのだという気づき、それこそコペルニクス的転回がおこったのではないのでしょうか。その直感によって、漆黒の闇に覆われていたゴータマの心に、—— 時には恐怖を与え、時には甘美な世界へ誘惑する悪魔が暴れ回るゴータマの心に、一条の光が差して、瞬く間に世界が輝いたのだと思えます。

内観 成道から一週間、菩提樹下にとどまっていたというのは、その喜びに浸っていた時間でありましょう。それから、一週間ごとに違う大樹に移っては、瞑想を重ねていったのは、迷いの原因を尋ねた内観の時であり、迷いを超える道理が次第に明らかになってくるのに必要な時間だったのではないのでしょうか。

なぜ、はじめの直感に引き続く内省(内観)が必要なのかというと、それは仏教だからであります。なぜなら仏教は、先にも触れたように、超越的な神の支配から自由になった教えなのです。それまでは自身が直面する苦悩も不幸も、神がもたらしたものであり、それからの解放も神の力を頼むほかありませんでした。そうした宗教なら、神の許しなり啓示があれば、その瞬間にすべての問題が解決してしまうことでしょう。

しかし、ブッダの悟りは、外に向けていた目を内に転ずることから起きたのでした。それは未曾有の経験であって、ブッダ自身が誰よりも驚いた、そんな出来事であったと思います。ですから、出家してからというよりも、幼い時から抱え込んできた出口のない暗黒に射した光に全身が包み込まれるような歓びにひたっておられたのも当然のことでありま

しょう。

ダルマが明らかになってくる その歡びがしずまるにしたがって、今度は、苦惱の原因をたずねる内觀が始まったのだと思います。というのも、苦惱の原因が他にあるならば、何も考える必要はありませんが、苦惱を引き起こした原因が自分にあるということになれば、その原因は自分自身で考えるほかないからであります。苦惱の原因が自分にあるということは、自分で自分の首を絞めていたという、実に愚かしい、実におかしな話であります。ですから、その全貌が明らかになってくるには心しずかに待つ必要があったのだと思います。

【参照】 親鸞聖人 百日の六角堂参籠→夢告→吉水への百日聴聞
信國 淳先生 池山栄吉先生との出会い→自我の崩壊→如来の拝見

瞑想を続けるブツダに、次第に法（ダンマ）が明らかになってきましたが、それにつれて、ブツダには、この法（ダンマ）は人々にはわかってもらえない、という不安と絶望の思いがふくらんできました。

ブツダは、ふたたびアジャパーラ樹のもとに座を移して、また一週間の瞑想に入りました。その時です。梵天ぼんてんがブツダの前に現れて、人々に仏法を説いてくださるよう懇請したのでした。

「梵天勸請」の物語

その時、世尊は、ひとり隠れて、静かに瞑想にふけておられたが、心の内にこのような考えがおこった。

「私のさとしたこの法は深遠で、見がたく、難解であり、しずまり、絶妙であり、思考の域を超え、微妙であり、賢者のみよく知るところである。… 人々は五欲を楽しみ、五欲を喜び、五欲に踊る。かかる人々には、この縁起の理は見がたく、この涅槃の理は悟りがたいであろう。もし私が法を説いたとしても、人々はわたしの言うところを了解せず、私はただ疲労こんぱいするのみであろう。」

その時、梵天ははるかに世尊の思うところを知って、かく考えた。

「ああ、この世は滅びる。ああ、この世は破滅する。いまや世尊の心は、沈黙に傾いて、法を説くことを欲したまわぬ。」

かくて梵天は、… たちどころに梵天界より姿を没して、世尊のまえに現われ、世尊を合掌礼拝して言った。

「世尊よ、法を説きたまえ。世尊よ、願わくは法を説かせたまえ。この世には、その眼の穢れに蔽われること少なき人々もいます。彼らは、法を聞かねば退き墮ちることでしょうが、もし法を聞くことができるならば、真理を悟る者となるでしょう。」

その時世尊は、梵天王の勧請を知りて、衆生に対する哀憐の心を生じ、覚者の眼をもって世間を眺めたもうた。(略) かくて世尊は偈をもって梵天王に答えて言った。

いま、われ、甘露の門をひらく。

耳あるものは聞け、ふるき信を去れ。

いのちを貫く法 インドから遠く離れた日本で、ブッダ在世の時から2500年もの時がすぎた今、私たちがこうして仏法を聞くことができるのも、法を説くことをあきらめかけていたブッダに、梵天が伏してお願いしてくれたおかげであります。

ところで、梵天とは、バラモン教で創造神として崇められているブラフマンのことだそうです。ですから梵天勧請という説話は、天地をあげての願い、つまり生きとし生ける者の願いをあらわしていると言えましょう。ブッダに明らかになった法（真理）は、ほかでもない、すべてのいのちを貫く法でありました。だから天地に生きるいのちを代表して梵天が勧請されたのでありましょう。

初転法輪 梵天の勧請を受けたブッダは、自らが悟った法を人々へ説く旅に出ます。

*当時のインドでは、限られた者にしか、自分の獲得したものを伝えようとしませんでした。人を限らずにすべての人に伝道しようとしたところに、ブッダの教えの普遍性の一端がうかがえます。

はじめに行ったのは、ブッダガヤから200kmも離れたベナレス郊外のサールナートにあった鹿野苑でした。ここは「仙人の集まる場所」であって、宗教家の集合場所でありました。ここに、釈尊が苦行を共にした五人の仲間がいたからでした。ブッダはそこで何を説かれたのでしょうか？

今回は、ブッダの覚られた法（ダンマ）について考えてみたいと思います。

(藤谷知道)